

## 0. はじめに

会員の皆様、お変わりありませんか。今回の原稿を書くにあたり、周囲の環境は変わりました。それは、日本社会が「コロナのトンネル」を抜けたことです。新型コロナウイルス感染症の扱いが変更され、人の動きが活発になりました。私も控えていたオープンキャンパスへの参加を再開しました。やはり、オンラインよりも実際に足を運んで見た方が良いと実感しています。学問との交わり。人との交わり。漂う空気。非常に心地よく感じます。新聞によると、巷では外国人観光客が戻り、宿泊施設では強気の価格設定でも稼働率が高いそうです。一方、コロナ期間に融資を受けた自営業の人たちの債務返還が始まりました。中には客足が戻らず閉店せざるをえなくなり、大変な思いをされている方もいるようです。また、このコロナの影響が出生数の減少につながったという記事もあります（<https://sp.m.jiji.com/article/show/2956037>）。陽の当たるところあれば、陰になるところあり。

### 1. 昨春入試(2023年度入試)について

合格先一覧については、進路部 HP をご覧下さい。特筆すべきことは、東北大学の合格者が8名と、直近10年間で最多だったことです(県内では宇都宮、栃木、宇都宮東、宇都宮女子に次ぐ数)。この学年は、中学卒業式、高校入学式・始業式を除いた年度跨ぎの全国一斉休校の最中に始動した学年でした。学年が進むにつれて緩和はされたけれども、部活動や学校行事において制約も受けました。気の毒としか言い様がない一方で、生徒たちは本校のリソースを最大限活用し、数多の困難を乗り越えてそれぞれの進学先を決めていきました。

### 2. 職業人による講演会

まず、同窓会の支援に対して深く御礼申し上げます。今年度は「高校生のためのリーダーシップ開発—自分らしくチームで力を発揮するために—」という演題で、共立女子大学ビジネス学部の岩城奈津准教授に講演していただきました。今回の企画は本校卒業生の宮崎乃亜さん(2020年3月卒、附属中3期生)が縁を作ってくれたことがきっかけです。在籍中は生徒会長として各種行事で活躍し、その経験を基にこの大学へ進学しました。講演当日はアシスタントとして一緒に来校し、大学で知のトレーニングを積んだ姿を後輩や我々教員に見せてくれました。当時を知る教員たちは東雲ホールの後方から、頬を緩めて彼女の話す様子を眺めていました。この講演の様子は大学のHPでも紹介されているので、お時間がございましたらご覧ください（<https://www.kyoritsu-wu.ac.jp/academics/undergraduate/business/news/detail.html?id=4440> ※2024年1月20

日確認)。





### 3. 大学の募集停止と女子大をめぐる動き

これまでも散見はされたのですが、2023年度は特に大学・短期大学の募集停止のニュースが多くリリースされた気がします。一部の短期大学は4年制大学への改組に伴う募集停止ですが、関東地区で主なものは、恵泉女学園大学(東京)、大妻女子大学短期大学部国文科/英文科(東京)、実践女子大学短期大学部日本語コミュニケーション学科/英語コミュニケーション学科(東京)、東京女子体育短期大学保健体育学科(東京)、上智大学短期大学部(神奈川)などが挙げられます。恵泉女学園大学の動きは閉学を前提としており、女子大不人気の報道を過熱させたと思います。見出しも「女子大離れ 深刻」(読売)、「女子大活路を探る」(朝日)とかなり大きく載っておりました(その方が売れるでしょう)。良妻賢母教育、花嫁修業などのかつてのイメージが残っているという論調ですが、津田塾大学の高橋裕子学長は次のように述べています。「本学は1900年創立以来123年間、1回たりとも良妻賢母教育を目指して高等教育を展開してきたことはない。女性が人間としてどこまでも伸びていけるような基盤を提供できるよう(リベラルアーツ教育を)重視してきた」(高校教員対象の大学説明会での挨拶で)。東京女子大学の森本あんり学長はこのようなコメントを書いています。「ジェンダーギャップ125位のこの国で、女子大学の共学化を論じるなど、恥ずべき暴論である。国会議員の半数が女性になってから言え。」(2023年7月9日付読売新聞「わたしは、不法移民」の書評の一節)。

私は女子生徒の進学指導をする際、女子大や短大はいつも選択肢に数えています。面倒見の良さや気兼ねなく過ごせる環境、併せて最近の短大は4年制大学への編入指導に力を入れている、4年制大学の受験がうまくいかなかった生徒にも勧められるからです。

#### 4. 大学入試学会

大学入試センター試験から大学入学共通テストに衣替えして、4回の試験が実施されました。明らかに以前より問題が難しくなり、直近の3回では何らかの科目で平均点が過去最低を更新している状況です。問題作成方針には、「知識の理解の質を問う問題」「思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題」「学習の過程を意識した問題の場面設定」を重視すると書かれており、確かにそのような構成になりました。一方、専門家の中には厳しい見方をしている人もいます；

「受験生にも出題者にもつらい問題」（南風原朝和 東京大学名誉教授、専門はテスト理論・心理統計学）。

「過去の入試改革の歴史から学んでいない」（倉元直樹 東北大学教授、専門は教育測定論・大学入試）。

「潮目が変われば、共通テスト離れがあつという間に広がる」（木村拓也 九州大学大学院教授、専門は教育社会学・教育計画論）。

（いずれも出典は朝日新聞 EduA）

国公立大学は後期試験の定員を縮小または試験自体を廃止して、その分の定員を総合型選抜や学校推薦型選抜に付け替える傾向にあります。私立大学は、入学者の約6割を総合型・学校推薦型選抜でとっています。このような潮流において、昨年12月には大学入試学会という新しい組織が設立されました。大学入試を学術研究の対象として捉えようとする動きのようです(詳細はホームページ(<https://www.jaruas.jp>)をご覧ください)。筑波大学の永田恭介学長は「一般選抜の2次試験を面接と小論文中心に変えたい」と述べています。また、東北大学の野英男総長は、将来、全部の入試を総合型選抜にすると述べています。それは極端すぎるのではないかと思いましたが、この学会設立の話を知り、大学入試は18年後(この年18歳人口が最少)、制度的技術的にドラスティックな変化をする、あるいはすでにしているかもしれないと感じました。○すべての後期試験を廃止してその分の定員を他の試験に割り当てる。現在の後期試験実施日(3月12日)に年度末行っている2次募集(欠員募集)を実施する。○国公立大学志願者全員に志望理由書の提出を義務づける。媒体は紙でなく動画。○客観問題の解答がGoogle Formsになって試験を終えたその日に点数がわかる。○解答用紙がiPadに、筆記用具がApple Pencilに代替される。・・・これらはすべて空想です。誤解のないように。